タイトル「金の糸で繕い繋ぐもの」

《登場人物》

新見（にいみ）　創（はじめ）（14）……中学2年生。

藤原（ふじはら）　渚沙（なぎさ）（14）……新見の同級生。

烏田（からすだ）　金之助（きんのすけ）（68）……通称「カラス爺」。

女の子

男性

老婆

《概要》

地震により割れてしまった祖父の形見である酒器を直すために、烏田金之助（68）を尋ねる新見創（14）。

創は金継ぎで酒器を直しつつ、烏田と対話する。創は町の風景が変わることに嫌悪感を抱いていたが、烏田は町が変わっても思い出は心の中に変わらずあり、そんな住民がいれば町は何度でも復興できると語る。

創は他県に引っ越すが、成人し帰ってきた際には直した酒器で一緒に飲もうと烏田と約束し、「この町が好きだ」と告げる。

創M「俺はこの町が嫌いだ」

SE　自転車のブレーキ音

渚沙「あーやっぱり、ここにいた」

創「渚沙、どうした？」

渚沙「『どうした』じゃなくて、貸したノート返してよ！　宿題ができないんだけど！」

創「ごめん、忘れてた」

渚沙「いっつもここにいるよね。まぁ、創君の好きな町を一望できるいい場所だけど」

創「違う。一人になれるからいるだけだよ」

渚沙「はいはい、天邪鬼なんだから」

創「はぁ？」

SE　緊急地震速報の音

地震による地鳴りの音

渚沙「（悲鳴を上げ）地震！？」

SE　地鳴りの音が、だんだん収まり

渚沙「お、収まった？」

創「すごい大きかったけど、母さんたち大丈夫かな」

渚沙「ダメ、電話繋がんない。え？」

創「どうした？」

渚沙「は、創君。あれ……」

創M「渚沙が指差す方を見ると、海から壁が迫っていた……いや、それは津波だった」

渚沙「そんな、私たちの町が」

創M「俺はこの町が嫌いだった。でも、だからって、無くなってほしいとは微塵も思ってはいなかった」

SE　轟音

創M「まさか、このタイミングで『南海トラフ地震』が来るなんて。幸い家族は無事だった。そう、家族は……だが津波は俺の生まれ育った家を海へ持ってった」

SE　避難所の騒めき

渚沙「暗い顔してるね。ご飯食べないの？」

創「避難所のご飯、菓子パンばっかりで飽きた……渚沙はよく明るくいられるな」

渚沙「お互い家族は無事だったんだから、マシな方だもん。私たちよりもっと辛い人はいる。だったらせめて、私たちは――」

創「そうだな……悪い」

渚沙「その陶磁器は、どうしたの？」

創「あぁ、壊れた家から見つけたんだけど割れちゃてて……」

渚沙「なら『カラス爺（じい）』に直してもらえば？」

創「カラス爺？」

渚沙「知らない？　避難所の隅で割れた食器

類を直してくれる人がいるのよ」

創M「早速向かうと、沢山の割れた食器やその破片に囲まれて作業する老人がいた」

創「……あなたが、『カラス爺』？」

烏田「そうだが、ちゃんと烏田さんと呼べ……直して欲しいものがあるのか？」

創「あ、はい。これです」

SE　陶器の破片を広げる音

烏田「ほぉ……大谷焼（おおたにやき）の徳利（とっくり）とお猪口（ちょこ）の三点セットか。なかなかいい品だ」

創「わかりますか？　祖父の形見です」

烏田「形見ってことは、この震災で？」

創「いえ、5年前に。ただ、じいちゃんはこれで俺と酒を飲むのを楽しみにして、大事にしてたんです。だから――」

烏田「そうか……なら、お前が直せ。『金継（きんつ）ぎ』

って知ってるか？」

創「きんつぎ？」

烏田「漆を接着剤に欠片をくっつけて、最後は金粉で装飾するんだ。こんな風に」

創M「見せてくれた食器には、金色の線が走っていた。もとはひび割れた跡なんだろうけど、稲妻のようで趣（おもむき）があった」

創「でも、俺に出来るかな？」

烏田「自分で直してこそ更に愛着がわくもんだ。ほら、さっさとやるぞ……この樹脂製の接着剤を使え」

創「漆じゃないんですか？」

烏田「本当はそうだがかぶれたり、一日中乾かす必要があって避難所じゃ大変だからな」

創M「俺が組み立てるようにくっつけている間に、カラス爺によって修復された食器類たちは持ち主の元へ戻っていった」

女の子「あ～梨香のコップだ！　おじいちゃん、見つけて直してくれてありがとう！」
男性「あぁ、この大皿におかずを乗せて家族皆で食べたなぁ……ありがとうございます」
老婆「（涙声）これ、夫と一緒に買った夫婦茶碗で……ありがとうございます。あの人との思い出だけでも戻ってきてよかった」
創「カラス爺は、何で食器を直しているの？」
烏田「壊れてゴミになってしまったとはいえ、もとは誰かの思い出だ。でもこのままじゃあ、廃棄物として処分されちまうからな」
創「そうですね」
烏田「それをただ片付けて新しくしても、そんなのただの見掛け倒しの復興だ。ちゃんと思い出や人の心も伴わなきゃ意味がない」
創「……思い出や人の心」
烏田「くっつけ終わったか？　おい、お猪口の欠片が一つ足りないぞ」
創「全部は見つけられなくて」

烏田「しょうがない。別の欠片で代用するか」

SE　器の欠片たちを「ガシャガシャ」と触る音

烏田「ここからお猪口の形に合うのを――」

創「他の器を使ったら、じいちゃんのお猪口じゃなっちゃう……なら、このままでいい」

烏田「どういうことだ？」

創「変だと思われるけど、きっと俺は思い出の中で生きていて……その思い出と違うものになるのが昔から耐えられないんです」

烏田「お前はいつの思い出で止まってるんだ。震災前か？」

創「もっと前。共働きの親に代わって俺を育ててくれた、じいちゃんが生きていた頃」

烏田「辛かっただろうが、人はいつか死ぬものだ」

創「わかってる！　でも連れてもらった場所や公園も『事前復興まちづくり』だとかで

高台へ移動して、幸せで大好きだった頃の町と変わっていくこの町が嫌いになった」

SE　創の嗚咽

創「その罰なのかな。最後は皆で過ごした家も町も全部もなくなって……どうして」

烏田「家はそうかもしれないが、町は違う」

創「え？」

烏田「俺はここで生まれて60年以上住んでる。昔と比べて見る影もないくらい変わったが、本質は今もずっと変わってない」

創「変わってない？　どうしてですか？」

烏田「俺みたいにこの町に住み続ける住民がずっと昔の――思い出や歴史を繋いでくれているからだ」

創「……思い出を繋ぐ」

烏田「どれだけ破壊されようが、そんな住民がいる限り町は死なないんだよ」

創「思い出や住民の心が伴っていれば、復興

で町は何度でも生き返るってことですか？」

烏田「そうだ。移り変わるものもあるが、心の中の思い出は変わらずあり続ける。それさえあれば、充分だ」

創「……カラス爺」

烏田「お前はお猪口の見た目が少し変わった程度で思い出があっても、じいさんの形見じゃなくなったって言うのか？」

創「それは……」

烏田「本当はそうじゃないと思うから、直したいと思ったんだろ？　違うか？」

創「違わないです」

烏田「だったら、早く直してやれ」

SE　器の欠片たちを「ガシャガシャ」と触る音

創M「俺は数多くの食器の破片――誰かの思い出の中から、一つの欠片を選んだ」

創「これにします。じいちゃん、庭の松の木が好きだったから。常盤木（ときわぎ）だし」

烏田「なんだそりゃ」

創「じいちゃんが教えてくれたんです。落葉せず年中葉がある松みたいな木を、『常盤木』って言うだって」

烏田「へぇ」

創「それに『常盤』には、『永久』って意味もあるんです」

烏田「それは縁起がいいな」

創M「烏田さんが欠けた部分に合うよう削ってくれたおかげで、パズルのピースがハマるように松模様の破片は綺麗にくっついた……まるで最初からそうだったかのように」

創「ありがとうございます」

烏田「礼を言うにはまだ早い。まだ終わりじゃないんだ」

創M「はみ出した接着剤を削り、漆を上から塗って継ぎ目をコーティング。仕上げに金粉を着ければ……」

創「できた」

創M「大谷焼特有の金属のような光沢で銀色に見える器に金色の線が入り、お猪口の松模様は一種のアクセントになっていた」

烏田「初めてにしては上出来だ」

創「最初金色の継ぎ目を見た時、『稲妻』みたいだと思ったんです。でもこうしてみると、欠片を縫い合わせる糸にも見えますね。まぁ、食器は縫えませんけど」

烏田「いや、『金継ぎ』は『金繕い』とも言うから、あながち間違いじゃないな」

創「そっか……なら、この金の糸が俺たちの思い出を直してくれるんだ」

烏田「心の中の思い出も大切だが、物をこう

して直せば次世代に繋ぐこともできる。じいさんの思い出を、お前が繋いだように」

創「じゃあカラス爺も金継ぎで直すことで、皆の思い出を繋いでるんですね」

烏田「これぐらいしかできないからな」

創「充分すごいですよ……俺、もうすぐ町を出るんです。単身赴任中の父がいる県に引っ越すことになってて」

烏田「そうか」

創「もし帰って来て見た目は変わっていても、この町での思い出は変わりませんよね？」

烏田「あぁ。それに、そのお猪口の松模様みたいに復興で新しくなる場所もあるだろうが、変わらない場所もあるさ」

創「ありがとうございます。20歳になって、じいちゃんの墓前でお酒を飲んだ後は、これで一緒に飲みませんか？」

烏田「酒の味も知らない子供が生意気な……いいのか？」

創「大事なことに気づかせてもらったお礼で

す。それまで元気でいてくださいね……必ず、ここに帰ってきますから」

烏田「そういや、名前を聞いてなかったな。坊主、名前は？」

創「新見創です」

烏田「創、じいさんとの思い出と見た目が変わって震災で壊れたが、この町が好きか？」

創「はい、好きです。沢山の思い出があるこの町が……大好きです」

（終）